

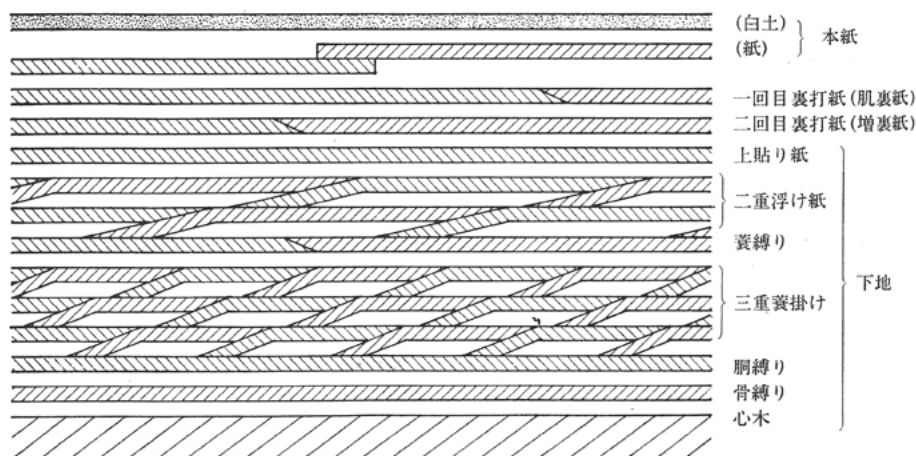


図4 新下地及び本紙貼付け模式図

が、下貼りについては以下の要領で行った。

一、下貼りは①骨縛り ②胴貼り ③三重裏掛け ④裏縛り ⑤二重掛け ⑥上貼りの順序に行った。

なお、①③④⑤には純楮の美濃紙を用い、②の胴貼りには、下地より出るあく(樹脂分)をよく吸収し、完全にこの層で遮断し、本紙に悪影響を与えない様にするため、泥分を多く含んだ名塩産の胴貼間似合紙を用い、⑥の化粧紙として、黒谷の楮一〇〇パーセント、厚み6匁(2尺×3尺)の紙を用いた。

また、表裏面のバランスを保つため、両面に同様の骨縛りから上貼りまでを行い、それぞれの接着剤には小麦粉の澱粉糊(上沈)を用いた。

なお、古代に於ける屏風の下地には、麻布を用いるのが常の様であったが、その後改良が加えられ、少なくとも現在はその伝統はない。また、脆弱化した本紙を支える下地には、伸縮の少ない、また丈夫な和紙構造のものの方がより良いということで、前記仕様の如き下地に替えることとした。

(木村法光)

鳥毛立女屏風の顔料について

鳥毛立女屏風に用いられた彩色顔料および下地顔料を調べるためにX線回折による調査を実施した。測定を行ったのは第一扇で、測定箇所、検出鉱物、顔料の種類を表にまとめた。

顔面は全体に薄紅色を呈す。右頬の一部には後補と思われる箇所があるが、オリジナルな部分では微斜長石(Microcline)に基づく回折ピークが認められる。唇の赤色部分では辰砂(Cinnabar)と微斜長石が検出され、赤色には朱が用いられていることが確認された(微斜長石は薄紅色の地に由来するもの)。また花鈿の緑色部分についても測定を試みたが、薄紅色の地に由来する微斜長石を検出するのみで、緑色の由来となるような鉱物は検出できなかった。

鳥毛立女屏風の顔料(第1層)

	測定箇所	色	検出鉱物	顔料の種類	備考
1	顔面唇	赤色	辰砂、微斜長石	朱、微斜長石	
2	顔面右頬	薄紅色	微斜長石	微斜長石	
3	顔面額花鈿	緑色	微斜長石	微斜長石	
4	頭部後方	白色		白土?	
5	頭部上方	白色	塩基性炭酸鉛	鉛白	後補部分
6	画面最上方	白色	方解石、塩基性炭酸鉛	炭酸カルシウム、鉛白	後補部分
7	左手の玉	緑色	孔雀石、方解石	岩緑青、炭酸カルシウム	後補部分

白色地の部分はオリジナルと思われる箇所では顕著な回折ピークは得られなかった。しかし方解石(Calcite)あるいは塩基性炭酸鉛(Hydrocerussite)などが検出できないことと、X線透過写真の透過性が良いことから考えて、この部分には白色粘土すなわち白土が用いられているものと推定できる。なお鳥毛立女屏風の残片を収めている巻物にはオリジナルな下地白色顔料の付着した紙片が貼り込まれており、この顔料付着部分二箇所について測定を試みたがやはり顔料に由来する顕著な回折ピークを得るには至らなかった。

鳥毛立女屏風には何回か修理の手が加わっているが、白色地について言えばX線透過写真で透過が著しく悪い箇所(写真では黒く見える)および透過が良好の箇所の

二つがある。前者からは白色の由来する物質として塩基性炭酸鉛すなわち鉛白が検出されている。このことはX線透過写真での不透過という事実とも符合する。また後者からは方解石および塩基性炭酸鉛が検出されている。両者が併用されているわけであるが、X線透過写真の透過性がよいことから考えるならば、塩基性炭酸鉛は量的に極わずかで、薄い上塗り層として存在するのも知れない。方解石すなわち炭酸カルシウムの起源としては石灰岩、大理石などの鉱物起源と貝殻などの動物起源が考えられるが、桃山時代以降は絵画の下地に貝殻胡粉が多用されたことが知られている。

(成瀬正和)

(註) X線回折は試料中に含まれる鉱物(結晶)の種類を調べるための装置である。例理学電機製文化財測定用X線回折装置を用い、管球 クロム、フィルターパーナジウム、印加電圧 20kV、印加電流 10mA、検出器 シンチレーション計数管、発散および受光側ソーラースリット 0.34°、照射野制限マスク(通路幅) 4mm、ゴニオメーター走査速度 2θ 4°/分、記録紙速度 20mm/分、フルスケール 400cps、時定数 2秒、の条件で測定した。測定角度範囲は試料の形状などを考慮して適宜設定した。

鳥毛立女屏風本紙裏面の調査

今回の鳥毛立女屏風の修理の過程において、裏打紙を順次除去し、本紙が現われた段階で、裏面の調査を行った。調査は主として、いわゆる